

〈特集「情報構造と名詞述語文」〉

スンバワ語の情報構造と名詞述語文* Information Structure of Sumbawa

塩原 朝子
Asako Shiohara

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
The Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies

要旨：本稿では風間(2016) (語学研究所論集第21号の特集のために作成された質問票) に含まれている「情報構造と名詞述語文」内の調査例文に対応するスンバワ語の文例を提供する。

Abstract: This article provides example sentences of Sumbawa corresponding to ‘the questionnaire for eliciting data on information structure and noun predicate sentences’ included in Kazama (2016) appearing in *Journal of the Institute of Language Research* No.21.

キーワード：インドネシア, スンバワ語, 情報構造, 焦点

Keywords: Indonesia, Sumbawa, information structure, focus

1. はじめに

本稿では風間(2016)による「情報構造と名詞述語文」調査例文に対応するスンバワ語の文例を提供する。これは語学研究所論集第21号(2016)の特集のために作成された質問票である。

第2節で焦点表現に関する文例を、第3節でその他の表現(名詞文, 名詞句内の修飾要素, 意外性と思い出し)に関する文例を提供する。特集アンケートでの例文番号はすみつきかっこ【 】に入れて示す。

スンバワ語はインドネシア共和国のスンバワ島の西部で話されている言語である。系統的にはオーストロネシア語族, マレヨ=ポリネシア語派, バリ=ササクグループに属する。Eberhard, Simons, and Fennig (2022)は1990年のデータに基づいてスンバワ語の話者を30万人と見積もっているが, 2022年時点では話者数はそれより増えていると考えられる。スンバワ語が話されている地域は行政的にはインドネシア西部南西諸島州(Provinsi Nusa Tenggara Barat)の中のスンバワ県(2020年時点での人口約51万人)と西スンバワ県(同約14万人)である。この二つの県ではスンバワ語を話すスンバワ人が80パーセント程度を占めていると推定されること, また現在のところ言語の次世代への継承も行われていることから, この言語の話者は少なく見積もっても40万人程度はいると考えられる。



本稿の著作権は著者が保持し, クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

* 本稿はJSPS 科研費19KK0011の助成を受けたものである。スンバワ語の調査にご協力くださったDedy Mulyadi氏、および本稿の草稿に目を通し有益な助言をくださった佐近優太さん、高橋翼さん(ともに東京外国語大学)にこの場を借りて深く御礼申し上げます。

以下に示す文例はスンバワ県 Pungka 村に居住する Dedy Mulyadi 氏（1975 年生まれ）への聞き取りにより得たものである。同氏はスンバワ県東部の Empang 町の生まれであるが、1990 年に県都である Sumbawa Besar 市に移り、その後配偶者の出身地である Pungka 村に移った。この三つの地域はいずれもスンバワ語の中心方言である Sumbawa Besar 方言に属する。（スンバワ語の方言については Mahsun(1999) とそれに基づいた Shiohara (2013)における記述を参照されたい。）

2. 焦点に関わる表現

2.1 項焦点の文

本稿では Lambrecht (1994: 213)に基づき、「焦点」を「語用論的に構造化されている命題中において、それによって断定(assertion)と前提の違いが生じる意味的部分（The semantic component of a pragmatically structured proposition whereby the assertion differs from the presupposition）と定義する。焦点は節におけるいわゆる項が表す内容に相当する場合もあれば、述部や文全体に相当する場合もある。以下このセクション 2.1 では項焦点の文例を、2.2 では述部焦点の文例を、2.3 では文焦点の文例を提供する。

動詞を述部の主要部とする文において主要項、つまり自動詞文の唯一項(S)、他動詞文の動作主項(A)、動作の対象を表す項(P)が焦点である場合は、それらの項が文頭に現れる疑似分裂文が用いられることが多い。スンバワ語の疑似分裂文は関係詞 *ade* またはその弱形 *de* に後続する名詞節（関係節として機能する）と焦点名詞句によって構成される。（以下の文例ではくだけた会話に用いられることが多い弱形 *de* が用いられている。この形はクリティックであり後続する要素と一つの音声的単位を構成する。）

焦点名詞句は(1)のように名詞節の前に現れても(1)'のように後に現れてもよいが、いずれの場合も焦点を表す下降のイントネーションを取る。

(1) *buku ta de=ka=ku=bəli paŋ toko saperap.*
 book this REL=PST=1SG=buy in store yesterday
 「私が昨日お店から買ってきたのはこの本だ。」【8.11】

(1)' *de=ka=ku=bəli paŋ toko saperap nan¹ buku ta.*
 REL=PST=1SG=buy in store yesterday that book this
 「私が昨日お店から買ってきたのはこの本だ。」【8.11】

以下この節では S, A, P が焦点である例をそれぞれ挙げる。

2.1.1 S が焦点である場合

この場合、(2)b のように疑似分裂文によって焦点が表されることが多い。

(2) a *ka=datan nya=Amin saperap ke?*
 PST=come ART=Amin yesterday Q

¹ ここで名詞句の最後に現れている指示詞 *nan* 'that' は文(16)に関して述べたような前方照応の機能を持つと考えられる。(1)はインドネシア語の文 *Buku ini yang dibeli di toko kemarin*「私が昨日お店から買ってきたのはこの本だ。」の翻訳として単独で得られた文であるため、この名詞句の指示物が先行文脈により実際話者に与えられていたわけではないが、翻訳元の文が持つ「本の購入」という含意に基づき名詞句の指示物が既に談話に導入されていることを想定し、前方照応の *nan* を用いたものと思われる。

b *nya=Ahmat* *de=ka=datan*.
ART=Ahmat REL=PST=come

(例えば, 昨日の集まりに珍しくやって来た人についての会話で)

a 「アミンがきたの?」

b 「いや, アフマツトがきたんだ。」【8.1】

(2)b'のように前提を表す部分が先に現れてもよい。また(2)b''や(2)b'''のように擬似分裂文ではなく, 無標の自動詞文を用いてもよい。

(2) b' *de=ka=datan* *nya=Ahmat*.
REL=PST=come ART=Ahmat
「きたのはアフマツトだよ。」【8.1】

b'' *nya=Ahmat* *ka=datan*.
ART=Ahmat PST=come
「アフマツトがきたんだ。」【8.1】

b''' *ka=datan* *nya=Ahmat*.
PST=come ART=Ahmat
「アフマツトがきたんだ。」【8.1】

スンバワ語には形容詞を独立した品詞として認める統語的・形態的基準が存在せず, 性質や状態を表す語は動詞として現れる²。「大きい」を表す *rajo* も動詞であり, その属性を持つものが焦点である場合は, (3)b にみられるように典型的な自動詞と同様の形で分裂文に現れうる。

(3) a *nya=Ahmat* *lebe* *rajo* *ke?*
ART=Ahmat more big Q

b *sionj* (*si*), *nya=Amin* *de* *lebe* *rajo*.
NEG AST ART=Amin REL more big

a 「アフマツトのほうが大きいんじゃないの?」

b 「違うよ, 大きいのはアミンの方だよ。」【8.3】

S について尋ねる疑問文は(4)a のように疑似分裂文の形で現れるのが通常である。回答においては b のように焦点を表す S が単独で現れることも多いが, 疑似分裂文が現れる(4)b' も許容される。

² マレー語では形容詞と動詞を区別する根拠として名詞を直接修飾できるか否かという基準があるが, スンバワ語では動詞も名詞を直接修飾することが可能であるためこれを品詞分類の基準として用いることはできない。

- (4) a *sai* *dε=ka=datar?*
 who REL=PST=come
- b *nya=Ahmat.*
 ART=Ahmat
- b' *nya=Ahmat* *dε=ka=datar.*
 ART=Ahmat REL=PST=come

a 「誰が来たの？」

b 「アフマットだよ。」

b' 「来たのはアフマットだよ。」【8-2】

2.1.2 Aが焦点である場合

この場合もSが焦点である場合と同様(5)bのように擬似分裂文が用いられる。焦点を表す要素が文頭に現れることが多いが、(5)b'のように前提を表す部分が先に現れてもよい。

- (5) a *ka=bəli* *lamon nan* *lij* *ina?*
 PST=buy clothes that by mother
- b *nosoka.* *aku* *dε=ka=bəli* (*lamon nan*).
 NEG.AST.PST 1SG REL=PST=buy (clothes that)
- b' *nosoka.* *dε=ka=bəli* (*lamon nan*) *aku.*
 NEG.AST.PST REL=PST=buy (clothes that) 1SG

a 「お母さんが誰がその服を買ったの？」

b 「ちがうよ.私が買ったんだよ。」

b' 「ちがうよ.その服を買ったのは私だよ。」

さらに(5)b''や(5)b'''のように無標の他動詞文を用いてもよい。(5)b''では焦点を表す要素が述部の前に、(5)b'''では述部の後に前置詞句の形で現れているが、そのいずれもが許容される。いずれの場合も焦点を表す *aku* に強勢が置かれる。

- (5) b'' *nosoka.* *aku* *ka=bəli* (*lamon nan*).
 NEG.AST.PST 1SG PST=buy (clothes that)
 「ちがうよ.私とその服を買ったよ。」
- b''' *nosoka.* *ka=bəli* (*lamon nan*) *lij* *aku.*
 NEG.AST.PST PST=buy (clothes that) by 1SG
 「ちがうよ.私とその服を買ったよ。」

ただし, 焦点を表す要素が述部内の人称クリティックとして現れる(5)c のような文がこの文脈で用いられることはない。(この文自体は正しい文であるが, (5)a への返答としては用いられない。)

- (5) c ?nosoka. ka=ku=bəli lamoj nan.
 NEG.AST.PST PST=1SG=buy clothes that
 「ちがうよ.私はその服を買った。」

疑問詞疑問文は(6)a のように疑似分裂文で現れるのが通常である.回答においては(6)b のように A を表す項が単独で現れてもよいし, (6)b' のように疑似分裂文が現れてもよい.A を表す項が単独で現れる場合は談話小辞 *si* が現れることも多い。

- (6) a sai de=ka=bəli lamoj nan?
 who REL=PST=buy clothes that
- b aku (si).
 1SG (AST)
- b' aku de=ka=bəli lamoj nan.
 1SG REL=PST=buy clothes that
a 「誰がその服を買ったの?」
b 「私 (だよ) .」
b' 「その服を買ったのは私だよ。」

2.1.3 P が焦点である場合

- (7) a ka=pukil si=Siti lij tode=nan ke?
 PST=hit ART=Siti by child=that Q
- b nosoka. si=Wati de=ka=pukil.
 NEG.AST.PST ART=Wati REL=PST=hit
- a 「その子はシティを殴ったの?」
b 「違うよ.殴られたのはワティだよ。」【8-5】

この場合も(7)b のように疑似分裂文が用いられるのが普通である.焦点を表す要素が文頭に現れることが多いが, (7)b' のように前提を表す部分が先に現れてもよい。

- (7) b' nosoka. de=ka=pukil lij tode nan si=Wati.
 NEG.AST.PST REL=PST=hit by child that ART=Wati
 「違うよ.殴られたのはワティだよ。」

また疑似分裂文が用いられない文も許容される.焦点を表す要素は(7)b' のように動詞の後に現れてもい

いし、(7)b'''のように動詞の前に現れてもよい。いずれの場合も焦点を表す *si=Wati* 「ワティ」に強勢が置かれる。

(7) b'' *nosoka.* *ka=pukil* *si=Wati* *lij* *tode* *nan.*
 NEG.AST.PST PST=hit ART=Wati by child that
 「違うよ.その子はワティを殴ったよ。」

(7) b''' *nosoka.* *si=Wati* *ka=pukil* *lij* *tode* *nan.*
 NEG.AST.PST ART=Wati REL=PST=hit by child that
 「違うよ.ワティをその子は殴ったよ。」

P について尋ねる疑問詞疑問文は(8)a のように疑似分裂文で現れることが多い。回答においては(8)b のように P が単独で現れるのが通常であり、この場合、assertion を表す談話小辞が焦点名詞句の後に現れることが多い。(8)b' のように回答が疑似分裂文の形で現れてもよい。

(8) a *sai* *de=ka=pukil* *lij* *tode=nan?*
 who REL=PST=hit by child=that

b *adi* (si).
 younger.sibling AST

b' *adi* *de=ka=pukil* *lij* *tode=nan.*
 younger.sibling REL=PST=hit by child=that

a 「その子が殴ったのは誰？」

b 「弟/妹だよ。」

b' 「その子が殴ったのは弟/妹だよ。」【8-8】

2.2 述部焦点

述部が焦点である場合は文頭に述部が現れる。前提に含まれる内容を表す項 ((9)b では S, (10)b では P) は現れないことの方が多いが、現れる文も許容される。(9)b では P は文頭に現れているが、述部の後に現れてもよい。

(9) a *me* *paŋ* *ina?*
 which place mother

b (ina) *ka=lis* *tɔnɛ* *jaga.*
 (mother) PST=go.out a.while.ago morning

(例えば、朝少し遅く起きて来た A の父親が、姿の見えない母親について A に尋ねている場面で)

a 「お母さんはどこですか？」

b 「(お母さんは) 朝から出かけたよ。」【8-7】

(10) a *me paŋ tepoŋ tɔŋɛ.*
 where in cake a.while.ago

b *o... (tepoŋ nan) ka mɔ kakan liŋ adi mu.*
 ITJ (cake that) PST INCH eat by younger.sibling 2SG

a 「さっきのケーキどこにある？」

b 「ああ, (そのケーキは) 弟/妹がもう食べちゃったよ。」³ 【8-10】

2.3 文焦点

「どうしたの?」という問いへの返答に代表される文焦点の文は, 存在詞 *ada* 「～がいる/ ある」で関与者(動詞の主要項 S, A, P に相当する要素)を導入する形で現れることもあれば, 述部を文頭に置く通常の動詞文として現れることもある。

(11)と(12)は自動詞文の例である。いずれも問い a の「何があったの」という問いへの答えの文が文焦点を表していると考えられるが, (11)b では S に相当する名詞句が存在詞 *ada* 「～がいる/ ある」に後続して現れている。それに対して(12)b では通常の動詞文が用いられている。

【8-4】 文焦点 (自動詞文)

(11) a *ka=kuda?*
 PST=why
 「何があったの?」

b *ada tamue ka=datay.*
 exist guest PST=come
 「お客さんがきたんです。」(文字通りに訳すと「来たお客さんがいました。」) 【8-4】

(12) a *ka=kuda?*
 PST=why
 「何があったの?」

b *ka=teri tode nan.*
 PST=fall child that
 「子どもが転んだんです。」 【8-4】

³ この文脈で(i)のように A が文頭に現れる文は許容されない。(i)自体は正しい文であるが, (10)a への返答としては用いられない。

(i) ?adi mu kamo kakan.
 younger.sibling 2SG already eat
 「あなたの弟/妹はもう (何かを) 食べました。」

(13)は他動詞文の例である。文焦点を表すのに(13)b と b'では A と P に相当する名詞句がそれぞれ存在詞 *ada* 「～がいる/ ある」に後続して現れている。一方(13)b''では通常の動詞文が用いられている。

- (13) a *ada* *apa* *deta?*
 exist what this
- b *ada* *tau* *ka=pukil* *adi.*
 exist person PST=hit younger.sibling
- b' *ada* *tau* *ka=pukil* *lij* *tau.*
 exist person PST=hit by person
- b'' *ka=soro* *pipis* *lij* *tau.*
 PST=steal money by person

(電話の向こうで子供の泣き声がかきたのを聞いての発話)

- a 「どうしたの? (lit. これは何があった?)」
 b 「弟/妹を叩いた人がいたんだ。」
 b' 「誰かに (lit. 人に) 殴られた人がいたんだ。」
 b'' 「人にお金を盗まれたんだ。」【8-9】

3. 名詞文, 名詞句内の修飾要素, 意外性と思い出し

3.1 名詞文

この言語にはコンピュータが存在しない⁴。名詞句を二つ並列することで措定や同定を表す。

- (14) *diri=nan* *guru* *SMA.*
 person=that teacher high.school
- kamə* *20* *tin* *ņajar* *paŋ* *səkɔla* *ta.*
 already twenty year teach in school this
 「あの人は先生だ。この学校でもう 20 年働いている」【8-12】

名詞文における二つの名詞句の語順は自由であり、主題を表す要素が先行する(15)のような語順も、焦点を表す要素が先行する(15)'のような語順も許容される。いずれの場合も焦点を表す要素が下降のイントネーションを取り、それによって情報構造が示される。

⁴ ただし、コンピュータに近い自動詞として *dadi* 「～になる」や *basingin* 「～という名前である」がある。特に *dadi* は「～であった」という過去に成立していた同定を表す場合に用いられる。(現在成立している状況を表す際には用いられない。)

- (ii) *diri* *nan* *ka=dadi* *guru.*
 person that PST=become teacher
 「その人は先生であった。」

- (15) *bapa nya tau ana.*
father 3 person over.there
「彼のお父さんはあの人だ。」【8-13】

- (15)' *tau ana bapak nya.*
person that father 3
「あの人が彼のお父さんだ。」【8-14】

ただし, 定義を行う際は(16)のように定義の対象となる主題が先に, 定義を表す部分が後に現れる.主題として扱われる語がすでに先行する発話に現れている場合は前方照応を行う指示詞 *nan* 「それ」が主題を表す名詞句に修飾成分として現れることもある.

- (16) *puan (nan) sasuda nawar.*
the.day.after.tomorrow (that) after tomorrow
「あさってというのは明日の次の日だよ。」【8-15】

日本語のいわゆる「ウナギ文」, つまり動作が省略された文も名詞文として現れうる.(17)は他動詞文の P が焦点である文が名詞文の形で現れている.この場合, 焦点である P は(17)b のように A の前に現れてもよいし(17)b'のように後に現れてもよい.

- (17) a *apa de=mu=pesan?*
what REL=2SG=order
b *kawa aku.*
coffee 1SG
b' *aku kawa.*
1SG coffee
a 「何を頼む？」
b 「コーヒー, 私は」
b' 「私はコーヒー」【8-16】

(18)は他動詞文の A が焦点である文が名詞文として現れている.この場合, 焦点である A は(18)b のように常に P の前に現れる.P が A の前に現れている(18)b'のような文は許容されない.

- (18) a *sai de=ka=pesan kawa?*
who REL=order coffee
b *aku kawa.*
1SG coffee

b'ʔ *kawa aku.*
coffee 1SG

a 「コーヒーを頼んだのは誰？」

b 「私, コーヒーは」

b' (意図された意味) 「コーヒーなら私」【8-17】

3.2 形容詞

2.1 で述べたようにこの言語では他の言語の形容詞に相当するような状態・性質を表す要素は動詞として現れる。そのような語が名詞を修飾する際は *buku tebal* [本 厚い]「厚い本」のように名詞を直接修飾することもあれば, *buku de tebal* [本 関係詞 厚い]「厚い本」のように関係詞 *ade/ de* に後続した関係節の形で修飾することもある。いずれの場合も修飾要素は主名詞に後続する。複数の修飾要素が現れる場合, それらは等位を表す接続詞 *ke* を間に置いて並立する。

(19) *buku de=tebal ke baru nan ne mahal.*
book REL=thick and new that ITJ high

(19)' *buku tebal ke baru nan mega mahal.*
book thick and new that ITJ high

「その新しくて厚い本は (値段が) 高い。」【8-18】

3.3 意外性と思い出し

意外性と思い出しはいずれも副詞 *ampa* によって示される。(20)に意外性を表す例文を, (21)に思い出しを表す例文を挙げる。

(20) *nda gula ampa.*
NEG.exist sugar MIR

「(砂糖入れを開けて) あっ, 砂糖が無くなっているよ!」【8-19】

(21) *o... apa de=ka=ku=totan saperap ta ε... kelupa ...*
ITJ what REL=PST=1SG=remember yesterday this ITJ forget

o... tanya ampa ya=ku=ketemuŋ ke nya=Amin nawar.
ITJ this MIR FUT=1SG=see with ART=Amin tomorrow

「昨日何を思い出そうとしていたんだっけ, 忘れたなあ, ああ私は明日ナザールに会う予定だったんだっただな。」【8-20】

4 今後の課題

本稿では風間(2016)の質問票に従って収集したスンバワ語の例文を提供した。調査の結果, 同一の文脈

で複数の可能な構文が許容されることがわかったが, それぞれの構文が用いられうる環境について詳しいことはまだわかっていない. 今後の聞き取り調査と自然発話のコーパス分析でその点を明らかにしたい.

略号一覧

-	morpheme boundary	ITJ	interjection
=	clitic boundary	MIR	mirativity
1, 2	first person, second person	NEG	negator
ART	article	PST	past tense
AST	assertion	Q	interrogative
FUT	future	REL	relativizer
INCH	inchoative	SG	singular

参考文献

- 風間伸次郎. 2016 特集「情報構造と名詞述語文」調査例文. 東京外国語大学語研論集第 21 号. 39-44.
- Eberhard, David M., Gary F. Simons, and Charles D. Fennig (eds.). 2022. *Ethnologue: Languages of the World. Twenty-fifth edition*. Dallas, Texas: SIL International. Online version: <http://www.ethnologue.com>.
- Lambrecht, Knud. 1994. *Information Structure and Sentence Form: Topic, Focus, and the Mental Representations of Discourse Referents*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mahsun. 1999. *Variasi Dialektal Bahasa Sumbawa –Kajian Dialektologi Diakronis (Dialect Variation in Sumbawa –A Study of Diachronic Dialectology)*. Lombok, University of Mataram. MS.
- Shiohara, Asako. 2013. Voice in the Sumbawa Besar Dialect of Sumbawa. *NUSA* 54. 145-158.

執筆者連絡先 : asako@aa.tufs.ac.jp

原稿受理 : 2022 年 12 月 15 日